

ファイヤー・ワークス

打ち上げ花火



三沢 真帆



1

「おつかれ、真帆。
「ツはつかめたかい？」
「うん、けっこうツツかしいけど
がんばってみるー」
あんがとね、すばるんち」

2

朝練のあと真帆から
連絡があつて、教えてほしい
ことがあるから二人で
練習したいとの仰せ。
もちろん二つ返事で
オッケーした。

「やーしかし、さすがに
汗だくだねー☆」

「……」ほん



1

「……ん？
どしたのすばるん？」

パタパタと体操着の裾を
鳴らして風を送る真帆。
いやまあその、さっきから
ずいぶん……

「……女の子がおへんとか
気安く見せちゃいけません。」

2

「えー？

おへんくらい別にいいじゃん。

「……はすはるんしか
居ないんだし。」

ちよつと嬉しいことを

言ってくれる……が、

さすがに際どいところまで

持ち上げてた裾を

抑えようと試みて……



1

「んーでもさあー」

真帆が少し
イタズラっぽい
笑みを浮かべる。

「はっはっ」

2

「すばるんだって
こーんなべたんこな
おっぱい見ても
つまらないでしょ？」

心のスキを突かれた視界に
飛び込んできたものは、
まさに「たんこ」――
…もとい未発達だったが、
白く眩しい真帆の胸だった。



1

「なんてね！…
さすがにちよと
恥かしかつたかも★」

微かなふくらみはすぐに
体操着の下に収まったが、
オレのほうの動悸は
激しくなるばかりだ。

「……そ、そうだな、
つまんない…かな」

2

そっぽを向きながら
そう言つと、
顔を赤らめた真帆の
頬がふつとふくらむ。

「なんだよすばるん、
ハッキリ言っねー★
こりゃ見せ損だね、
がっかりだ」

「ちよと見るだけじゃ…
つまんないよ…真帆」

「…え…？」



1

「ん……んと……
み……見たいの
すばるん……？」
戸惑う真帆の瞳を
見返しながら、
無言でうなずく。

2

「……」

暫く押し黙っていたが、
やがてゆくりりと体操着を
たくしあげる真帆。
——再び視界を奪う、
小さなふくらみと
薄桃色の頂き。

「すばるん……
目がえろちだあ……★」



1

当然ながら、
ここまで来ると見るだけで
収まるはずもない。
「ま…真帆…
さ…触ってみていい？」

2

「んえ…
す…すばるんが、
そっ…したいなら」

1
お赦しが出たので、
ゆつくりと幼い双丘に
手を添える。

「ん……」
微かに喘ぐ真帆。
不快感を与えないように、
優しく撫でさすってみた。

2
「……すばるんの手、おっきいね♪
あたしのちっぴいがすっぽりだ。」
「ちっぴい……って、
どこで覚えてくるのそんな言葉。」
顔を上気させつつ言った
真帆の言葉が、
場を和ませてくれる。



1 「はっ…ん…ああ…んっ
す、すばるんのえっ…っい…っ」
♡

2 とうんとした瞳で
非難しみた声を
洩らす真帆。
しかし嫌がっていないのは
一目瞭然だった。



1 「…そつたなあ、
オレはえつちだから、
こんなこともしちゃうよっ」

2 「はえっ…っ…？
あっ…ひゃんっ！」



1

乳首に狙いを定めて、
軽く抓るように指を
動かしてみる。
「ふあ…っそんな…
おっぱいの先っちよ…
つまんじやあぁ…♡」

2

こちらの挙動にいちいち
敏感な反応を返す
真帆が愛おしく、
オレはいよいよ抑えが
利かなくなるのだった。



1

「あ…っ!?
やだやだすばるんっ…
スパッツおろしちゃ
ダメえっ!」

真帆の大事なところを
覆う薄く強い生地を、
痛くならないよう
努めながら摺り下げる。

2

「ダメだってばあ…
おまたムレムレで
恥かしいよお…☆」

真つ赤な顔で
イヤイヤをする真帆
——うん、それは
限りなく逆効果だ。



1
汗の匂いに交じって、
真帆の——女の子の
香りが鼻腔をくすぐる。

2
「ホントだ…湿ってるね
…これって…汗？」
真帆の股間に
ゆっくりと手を伸ばす。



1

「……!?」
す……すばるんっ……
さ……触っちゃだめだよ……っ」

そうは言っても、
不安の中に見え隠れする
期待感がありありと
伝わってくるので、
説得力は皆無である。

「ぬめりっ……
汗——じゃないよねっ」



1

宝物を扱うように、
この上なく優しく
濡れた秘所を愛撫する。

「ああ……ふああ……♡
なにこれ……身体が……
ふあああすののお……♡」



1

真帆の小さな身体が
かくかくと震えていたので、
しっかりと支えてあげる。
…その間も愛撫の手を
休めない辺りは
我ながらどうだろう…

2

「すばるんっ…！
すばるんっ…っ…っ…♡
あたしっ…っ
飛んでっちやいそっ…っ！
飛んでっちやたら…
ちゃんと捕まえてて…
ねっ…ねっ…」



1
「だいじまふだよ真帆…う！
しっかり抱きしめてて
あげるから…
安心して飛べばいい。
ファイヤーワークス
——「打ち上げ花火」は
自由に空を目指すんだ…う！」

2
「うん…っ♡
うん…うすばるん…っ！
もっど…もっど強く…
つよくう…っ！」
それが何を求めているの
懇願なのかも考えず、
真帆の昂りに
呼応するよつに
指の動きを早くする。



2 真帆がひと際
高い喘ぎを放つ。
絶頂に震える
小さな身体を、
強く、つよく抱きしめた――

1 「あ……ふぁ……♡
あはああん……っ!!」



1

「は……あは……
花火……はじけちゃったあ♡」

2

そう言つて恥かしげに
微笑む真帆。
口元の涎が艶かしくて、
妙に下ギマギとしてしまった。

「あ……」



1

股間から指を離すと、
ぬめった愛液が
ひとすじ糸を引く。
それを見た真帆は、ハッが
悪そうに舌を出して、

「あたしもえっちななあ…
すばるんのこと
言えないよね★」

2

心なし顔を赤らめながらも
開き直ったように、
オレの張り詰めた股間に
目を移して言うのだった。

「ふたりともえっちなだから…
つつき…しよっ」

「...で、コレはどーゆー状況なのかな？」
「ん？すばるんはこーゆーのキライ？」

どーしてこーなった。
マットの上で真帆の
幼い足に、ペニスを包まれ
ながら思案する。

「おっかしいなあ...
サキの持ってた本では、
男の人は足でして
もらつと悦ぶつて
書いてあったのに...」

2

それは割りと特殊な
男性のような気がする。
...てか聞き捨てならない
情報もたらされて
しまった...。

「どーする？
イヤだったらやめるけど」

3

「ああ...まあイヤとかじゃなくて
ちよつとびつくりしただけ...。
正直、真帆の足は気持ちいいから...」
「おっけー♪ んじゃ続けるよん☆」

嬉々として足コキに
やる気を出す真帆だった
てか、アソコ丸見えですけど...



1

「…んっ…しよ…
いしよ…うと…」
真剣な顔で足を
動かす真帆。
拙いのは当然だが、
それが逆に
絶妙な刺激となつて
オレの理性を苛む。

2

「…うくー」
「—ふわ!?
か…かたくなつたよま」

3

独立した生き物のように
蠢くペニスを見て
驚きの顔を見せる真帆。
「だ…だいしよぶ…
気持ちいいつてことだから
…続けて、真帆」



1 真帆が一心不乱にペニスの愛撫を続ける。足の指はすつかりとオレの先走りに塗れていた。

2 「むっん...ふ...」
—ふと気づくと、微かに荒い吐息が聞こえてくる。

3 「んっ...ふあ...」
息遣いに倣うように、微かに腰をよじっている真帆の姿があった。



1 「...どうしたの真帆？
どこが苦しい？」
なんとなく理由は判るが、
ちよとしたイタズラ心で
問いかけてみる。

2 「ん...と、その...
おー」
「お...？」

3 「おまたが...
ムズムズして...」
真つ赤な顔で何かを
訴えかける真帆。
こんなにしおらしい
彼女の姿は限りなく
レアである。



1

微かな嗜虐心を
刺激されて、
ペニスがいつそう
張り詰める。
「んと…真帆？
ちよつと…お願い
聞いてくれる？」

2

「んえ…お願いっ」
「真帆の大事なところ—
オマンコ」
「お…オマ…っ!?」



1

オレの露骨な言葉に、一瞬間が引きつったが、しばらく逡巡したあと――

「う…うん…」

「しょうがないなあ」という呟きが

聞こえてきそうな表情を浮かべると…両手の指でアソコを拡げて見せてくれた。

2

「すごい…キレイなピンク色だね…」
「そ…そおかな…」
「あん…がと…♡」

消え入りそうな声でお礼など言ってしまう真帆がたまらなく愛くるしい。



1

「……」
我慢できなくなつて
思わず指を伸ばす。

2

少し驚くそぶりを
見せた真帆だったが、
こちらを見返す
眼差しは期待に
満ちたものだった。



1

「ふあ…あつ…
ん…あうん…っ♡」
優しく愛撫するたびに
艶かしい喘ぎが響く。
すっかり顔を出した
クリトリスを、
強すぎないように
擦りあげる。

2

「あ…っ…
そこ…ちめ…っ…」
肉芽に触れるたびに
身体が跳ねる。
替わりに真帆の足の動きは
すっかり止まっていた。



1
「ほら...真帆？
足が止まっちゃってる...
自分だけ愉しむなんて
スルイよ」

2
「は...」
「めんすばるん...
...あたしもがんばるね...♡」
謝ってくれる
真帆が愛おしくて
オレのペニスには限界まで
みなぎるのだった。



1

「じあ…っ？
すばるん…っ♡
気持ちいい…？
あたしの足…
きもちいい…？」

真帆は足で、
オレは指で、
お互いの敏感な
部分を愛撫し
続けた。

2

「っあ…ああつ…
すこいよ真帆…っ！
真帆も…っ
気持ちいいんだよね…っ？
真帆のオマンコ…
くしゃくしゃになつて…っ！」



1
指で払って
さらけ出された
小さな臍口を、
ひつかくように、
押し込むように
擦り上げる。

2
「うん…っ！
うんうん…っ♡
気持ちいよ…っ！
すばるんの指が
優しくして
くれるから…っ♡
気持ちいいのぉ…っ！」



1 「ほら…♡
「わあぁぁん…っ!!」

2 「は…う…
あぁあ…っ!!」

真帆が絶頂に
喘ぐのとは同時に、
溜まっていた欲望が
勢いよくぶちまけられた。



1

「は……っ……
あ……はあ……っ♡」
上気した顔で
荒い吐息を吐く
真帆の白い肌を、
未だ止まらない
白濁液が汚していく。

2

「ふわ……これ……
赤ちゃんの素……っ
すごい熱いねえ……♡」
「……ごめん……
頭から足まですっかり
精液まみれに
なっちゃって……」



1

「…気持ちよかった？
すばるん」
「うえ…!?」
「…いやまあ
そりゃ…ねえ…」
いつもの
イタズラっぽい笑みで
問いかけてくる真帆。
言葉を濁したところで
意味を為さないのは
明白だろう。

2

「でしよでしょ？
…あたしもね、
気持ちよかったの
すこく♡」
嬉しそうに無邪気な
笑みを浮かべる。
その無邪気さを
秘めたまま、やはり
イタズラっぽく舌を
出していた。また。
「だから…ね？
すばるんと
ちゃんと最後まで、
えっち…したいな♡」

1

手近にある跳び箱に腰を預けて、
真帆の身体を抱きかかえる。
真帆はといえば
腕をオレの首に、脚を腰に絡ませ、
さながらコアラのようだ。

2

「あはは、こうしてると
ヒナみたいだよな」と
照れや不安を隠すために、
冗談めいたことを口に
したかったのかもしれないが、
ここは敢えてたしなめる。

1

「こーら、今は真帆のことだけ
考えていたんだから、
他の娘の名前出しちゃだめだろ？」

2

「ふあ…あは…そっか♪
…ごめんすばるん♡」
素直に謝ってくれる真帆の、
微かに残る不安を拭い去るように、
背中を優しく撫でてあげる。

1

「じゃあ…いいかな…?
力、抜いてね…真帆」
そう促して、屹立したペニス
真帆の入り口にあてがう。



1

「う……ん、痛くても……
我慢できるよ……♡」

健気に微笑む真帆の背中を、
安心させるように
ぽんぽんと叩いて――



1

「ん……うん……ん……」
焦らしたりなど考えず、
そのまま一気に貫いた。



1

「は…ひっ…んん…
あ…っ…っ…」

2

眉をしかめ、苦しそうに喘ぐ姿が痛々しい。目尻に溜まる涙が、破瓜の痛みを物語っていた。
「真帆…だいじよぶかい、まほ…？」

1

「はっつ…★
だいじょぶかと聞かれたら
だいじょぶじゃない…けどど
荒く息をつきながら、
弱々しく、それでも真帆は
笑みを見せた。」

2

「我慢する…つて、言ったもん。
すばるんと、えつち、するんだもん…っ♡」
駄々っ子の様な言い草が
あまりにも年相応で、思わず
くしゃくしゃと頭を撫でていた。
「うん…ありがとう…強いな、真帆は」

1

初めはさすがに
締め付けがキツかったため、
緩やかな動きだけだったが――

2

「んっ……ふぁあ……んっ……♡」

――やがて少しずつ、真帆の喘ぐ声に
艶が交じりはじめたので、
次第に動きも大胆になっていく。

1

「ふわあ…あ…♡
すばるんのおちんちんが…
あたしのなかに…出たり
入ったり…っしてるよおお♡」
蕩けるような表情を見せながら、
甘い声でつぶやく真帆。
痛みもだいぶ薄れてきたようだ。

2

「ねえすばるん…♡
すばるんも…気持ちいい？
あたしだけ気持ちいいのは
…やだよお？」

3

…今でも十分に
刺激を得られるのだが、
そんな嬉しい言葉をかけられたら
抑えようも無くなる。
「うん…わかってるよ真帆
…それじゃお言葉に甘えて—」

1

少し激しく、リズムミカルに腰を動かす。

「は……っ……はっ……っ……
あああ……っす……っ……
すばるん……っ……
すばるんがあたしのなかで
暴れてるっ……っ……」

2

際限なく迫る快感に
翻弄されるように真帆が喘ぎ、
…それを耳元で聞くオレ自身も
昂ぶりが止まらなくて……

1
「まほ……っ！
気持ちいいよ……っ！
まほが締め付けるたびに……
ぞくぞくする……っ！」

2
「ほんと……っ？
すばるんも気持ちいい？
嬉しい……っ♡
すっごくうれし……っ！」

3
二人して貪りあう快感の波も、
やがて絶頂へと誘われる
運命なのが恨めしい——
そんな矛盾した感情が渦を巻く。



1

「すばるん…っ♡
ねえすばるんっ！
今度は二人で…っ！
いつしよに飛んでっちやお？
ね…っ？」

2

切なげに懇願する真帆。
その願いに応えるように、
いつそう激しく腰を突き動かす。



1

「……ふわ……
あはああ……っ!!」

深く繋がったまま、
白濁した欲望を
思い切り解き放った。

1

「ああは……は……
あ……は……は……♡」

未だ絶頂が治まらないのか、
ぎゅつと目を閉じたまま
かくかくと震える真帆。

2

「はあ……は……」

そして、真帆の膣内に
包まれたままのオレのペニス
終わりを知らないかのように
精液を吐き出し続けるのだった。

1

「は……ふ……ふあ……ん……♡」

さすがに欲望も尽きた頃、
落ち着きを取り戻した真帆が、
惚けた瞳で繋がった部分を見下ろす。

2

「あ……あはは……す……てい……ん……
……お腹の中あったかい♡」

下腹部をさすりながら、
幸せそうに微笑む真帆の顔が
とても大人びて見えたのは
気のせいだろうか。



1

「…これで、赤ちゃん
出来ちゃう…?」

「…はい」

思わずむせ返る。
しまった、さすがに膣内に
出したのは考え無しだった
だろうか。

2

「…なーんて、まだ大人の身体
じゃないからムリかなよ」

あつげらかんとそよび言つて、
いつものイタズラっぽい笑みを
浮かべる真帆。

3

「ちゃんと大人になったら、
その時また…ね、すばるん♡」

…先のごとは判らないけれど、
そんな未来も——
あるのかも、知れない。